法律問題と模擬裁判を使った上級日本語コースのデザイン

この論文は、まず３つのタイプの法律問題を通じ日本の社会のあり方を探るとともに、模擬裁判を使っての言語能力と批判的思考の向上という二つの視点からコースデザインを論じ、その実践と学習効果の検証ついても述べる。

＜実際の事件とその文化的・社会的背景＞

1. 日本人の違法性の認識と「いじめ」・「体罰」

日本人の違法性の認識について、まずドラマやマンガなどのポップカルチャーを通じ、家庭や学校や部活動などで実際どのように体罰や暴力が描かれているかを調べ、司法が学内での暴行事件にどのように対応したかを調査し、法律的思考と一般常識の乖離について学生とともに論じた。さらに、2013年柔道女子選手15名が、全日本女子ナショナルチーム監督の園田隆二を始めとした指導者による暴力行為やパワーハラスメントをJOC（日本オリンピック委員会）に訴えた事件を取り上げ、この暴力問題解決に関する女性の役割について考えた。

2. 自殺

自殺については心中、切腹、安楽死の三つの形態をとりあげた。法律的視点からは、全て「自殺教唆・依頼殺人」として、一つの犯罪類型として捉えるが、文学的、歴史的、社会的視点からすると、心中に関しては「ロミオとジュリエット」や江戸時代の近松などが書いた文学作品、切腹に関しては「辞世の句」や「忠臣蔵」から見る侍の精神性、安楽死に関しては超高齢化社会における尊厳死の視点などからも考える必要がある。このような法律的な視点と歴史的、文学的、社会的観点との隔たりは非常に興味深いものがある。

3. 憲法９条と自衛隊

憲法９条問題は、避けることのできない日本の法律問題であるが、単に今までのケースを踏襲するだけでなく、自衛隊員の不足から入隊試験の答えが答案用紙に全部書いてあったという自衛隊受難の時代から、初めて肯定的に自衛隊員が描かれたドラマ 「空飛ぶ広報室」 にいたるまでの時代の変化についても学生と共に学んだ。

＜模擬裁判と言語教育及び批判的思考＞

さらに、この論文ではクラスでの模擬裁判の効果的利用法と、それを通じての言語能力、批判的思考、柔軟性、協働力などの向上について述べる。「話、聞く能力を伸ばすのに模擬裁判ほど適切な方法はない。特に、模擬裁判はインターアクティブでコンペティティブであるため、参加者の参加意欲が非常に高く、学習内容を内在化するのに極めて効果的だ。それに加え、的確な描写、反論、 即座の戦略の変更など、状況の変化に対する柔軟な対応、そして協働力も高めることが出来る」(Herron, Ruth, and Scott 2012)。當作靖彦(2013)も２１世紀を生き抜く能力として必要なものの中に「協働力」を上げている。

＜アンケート調査＞

　最後に、学生の言語能力と批判的思考がどのように改善されたかを検証するために、以下の内容に基づいてアンケート調査を行った。

1. 推論における理由と結論の結束力を高める力と言語能力の向上
2. 前提条件や憶測に対する懐疑的視点からの洞察と言語能力の向上
3. 仮説の効果的な使用と言語能力の向上
4. 情報の信憑性に対する的確な判断力と言語能力の向上　Alec Fisher(2012) 一部参考